DinkelackerとRadeberger、シュトゥットガルトのビールブランドで折半出資の合弁会社を計画

ドイツ連邦カルテル庁が承認すれば、新会社がシュトゥットガルトのビールブランドの醸造、瓶詰め、流通を担う見通し

2026年11月17日（火）



Dinkelacker Brauerei Beteiligung GmbH & Co. KGとRadeberger Gruppeは、シュトゥットガルトでビール事業の一部を統合するため、出資比率を50％ずつとする新たな合弁会社の設立を計画している。11月16日（月）、Brauweltが報じた発表による。

両社によると、各社が同じ比率で出資するStuttgarter Brauereien GmbH & Co. KGを設立する。新会社は、両グループのシュトゥットガルトのビールブランドについて、自らの責任で醸造、瓶詰め、流通を担う見通しだ。

発表によると、両社はこの合弁事業を通じて、シュトゥットガルトの醸造の伝統を長期にわたって守り、維持することを目指す。これにより、地元ブランドに関わる主要な事業活動は、2社の醸造会社に分散した状態ではなく、共同出資の単一企業に集約されることになる。

この取引はまだ完了していない。ドイツの競争当局である連邦カルテル庁の承認が必要だ。審査が終わるまでは、合弁会社の設立は成立済みの取引ではなく、計画段階にとどまる。

Brauweltが公表した情報には、財務条件は含まれていなかった。また、規制当局が計画を承認した場合に新会社がいつ事業を開始するのか、あるいは生産拠点、人員、物流に変更が生じるのかについても明らかにされていない。

こうした詳細はまだ不明だが、今回の取引は、ドイツの醸造会社が、確立された地域ブランドを維持しながら、生産、瓶詰め、流通を再編するために産業面での提携を活用している可能性を示す事例として注目される。ビールメーカーにとって、こうした共同の枠組みは、ブランドの独自性を直ちに手放すことなく、製造や販売の機能を集約する手段となり得る。

この点で、シュトゥットガルトの合意は飲料業界全体にとっても重要な意味を持つ。ビールなどの飲料メーカーは、地域ブランドの伝統を守りながら、製品の製造、包装、市場への輸送にかかるコストを抑えるという課題に直面している。合弁会社が承認されれば、既存企業が事業基盤を再編しつつ地域ブランドを守ろうとする取り組みの、注目すべき事例となる可能性がある。